



旭川医療センター病理診断科
玉川 進

2013年の講演は、札幌、旭川、根室標津、高松、稚内、士別の6か所を訪問し、稚内は2回目でした。講演は何度やっても勉強です。

なお、連載第8回で香川県について書いたところ、木村節子会長からお電話をいただきました。みなさん礼儀正しく、頭が下がる思いです。

連載 第10回 学校での症例

はじめに

今回は、実際にあった症例を紹介します。学校内で心停止になる児童生徒はまれにいます。なお、「 」の部分は事後に聞き取りをしたそのままの言葉を表しています。

症 例

中学生男子・A男。持病はありません。その日は体育の授業で持久走をしていたのですが、A男が体調不良を訴えてきました。体育担当の教諭・B先生はA男を体育館で休ませ、養護教諭を呼びました。養護教諭が到着してA男の様子を見ると、うつぶせになっており、顔は蒼白で意識がありません。すぐさま左手首で脈を探したのですが触れず(図1)、顔を近づけても呼吸はしていませんでした。養護教諭は「このまま死んでしまうかもしれない」とおののきつつも、A男を仰向けに寝かせ、すぐに心肺蘇生を開始しました。

B先生は混乱した状態で「目の前で起こっていることが理解できなかった」のですが、養護教諭が心肺蘇生を始めたのを見て我に返り、自分ができることは119番通報であると考えて、職員室へ走っていきました。

職員室には教頭先生とたまたま授業がなかったC先生(※写真では“教諭”と表示)がいました。B先生は2人にA男の様子を告げた後、119番通報しました。教頭先生とC先生は「とにかく体育館に行かなくては」と2人で走り出したのですが、途中で教頭先生が職員室前にAEDが設置されている(図2)ことを思い出し、取りに戻りました。

教頭先生が持ってきたAEDをC先生が受け取り(図3)、A男の胸にパッドを貼ろうとしたのですが、「『死んでしまうかも』との恐怖や不安、緊張から、うまく貼れなかった」そうです。震える手でパッドを貼り終え、AEDを作動させると『ショックが必要です』とのメッセージが流れました。後に確認されたAEDの記録では心室細動でした(図4)。誰がボタンを押すのか、4人の先生全員が顔を見



図1 うつぶせのA男。脈が触れません



図2 職員室前の廊下にAEDがあります



図3 教頭先生とC先生がAEDを持って到着しました

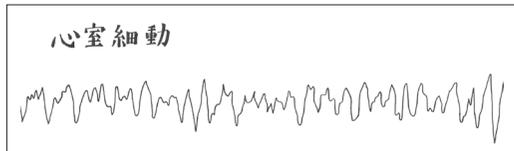


図4 心室細動。心臓の筋肉が1本1本、勝手に動いている状態です



図5 意を決した教頭先生が、
AEDのボタンを押しました



図6 消防士2名が蘇生資機材を
持って到着しました

合わせましたが、阿吽の呼吸で最も役職の高い教頭先生がボタンを押しました（図5）。教頭先生は「本当にボタンを押してよいものか、とても不安だった」そうですが、ボタンを押しました。養護教諭がA男の急変に気づいてから、ここまででわずか2分でした。

1回のAED放電では心臓の動きは戻らず、先生方は続けて心臓マッサージと人工呼吸を実施しました。幸運なことに、この日は地元の消防署が地域を巡回する日で、学校のすぐ近くに消防車がいました。A男が倒れてから4分後、消防士が到着しました（図6）。先生方は「とても心強く」感じたそうです。消防士は救急救命士の資格をもっており、先生方から引き継いで心肺蘇生を行いました。急変に気づいてから8分後に心拍が再開し、先生方は「何とか助かった」と胸をなで下ろしたそうです。

A男はその後、到着した救急隊によって近隣の病院へ搬送されました。入院は約4週間、1か月後には後遺症も残さず、登校を再開しています。

コメント

A男は運がよかったと言えます。養護教諭が呼ばれず、体育館の中で一人休んでいるだけだったら、おそらく亡くなっていたでしょう。また、この学校では毎年、消防士を招いて救命講習を開催していて、教職員も生徒も受講していました。先生方が迅速に行動できたのは、この講習のおかげです。緊迫した現場では経験していたことも十分にできなくなりますので、やったことがなければ、なおさらできなかったことでしょう。

また、この症例からわかることは次の3点です。

- 1) 心臓はいつ止まるかわからない（図7）
- 2) 早く手当てをすれば助かる（図8）
- 3) 定期的な訓練が必要（図9）

ぜひ本連載を何度も読み返し、心肺蘇生のイメージトレーニングをしていただきたいと思います。



図7 何の前ぶれもなく、心臓
が止まることがあります



図8 一刻も早く心肺蘇生を実施します

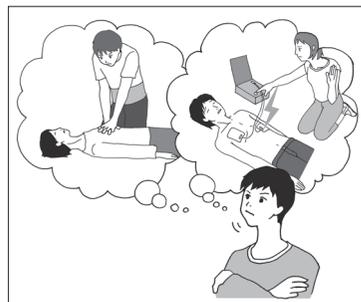


図9 定期的な訓練で体に覚えさせましょう